

4) 急性心筋梗塞症の疫学的指標 —半閉鎖地域に於ける検討—

熊倉 真・長谷川 尚
五十嵐 仁・鈴木 薫 (県立新発田病院)
木戸 成生 (内科)

当院に収容される AMI 患者の大部分は新発田市の住民で周辺町村の中条・紫雲寺・聖籠町・豊浦村からの患者も含まれるが、当院は地理的にその中心に位置し他に CCU を持つ施設が無いので当院に収容された患者の特性はこの地域患者の特性を現わすものと推定される。S.51 から H.1 迄の14年間に当院に入院した 329 例を対象とした。第一期 S.51~54年61人、第二期 S.55~59年 105人、第三期 S.60~H.1年 163人の三期に分けて分析した。男 218人、女 111人で各々平均年齢が 64.2、70.1才で有意に女性が高齢であった。前壁がらみの梗塞は男性で有意に多かった(男54%、女性37.8%)。年齢階層別患者数は正規分布に近い型を呈しピークは男60才代、女70才代で10才の差が見られた。発生率は年齢と共に指数関数的に増加し、人口は30才以上では年齢が増加するに連れ減少する為患者数は正規に近い分布となり男女のピークの差は発生率の差によるものと思われた。月別発生数は夏に少なく冬に多い傾向があり、5月が最も多く7月が最も少なく8月と10月に小さいピークが見られた。時刻別発生数では深夜帯に最も少なく、日中中等度の山があり、夜の8時~10時に最も多かった。この傾向は10月から5月で顕著で男女差も見られた。risk factor として DM、高 TC、高血圧、喫煙、低 HDL-C、高尿酸血症等について検討した。50才未満の男で高尿酸血症が多く、高 TC、高血圧と低 HDL-C は女性に多かった。入院時の重症度 (Killip) は脳卒中と高血圧の

既往のある人で重症で、部位別で見ると下壁がらみの梗塞で高血圧症の既往が在る人で重症であった。発症3時間以内に収容される率は年々増加傾向にあるが平均40%で6時間以内でも55%と低かった。救急車の利用は平均56%で開業医を通して入院する場合でも60%と低かった。

5) 新潟県における冠動脈硬化症の危険因子 —若年者と中年者の比較—

小幡 明博・林 千治
田辺 直仁・宮西 邦夫
船崎 俊一・豊嶋 英明 (新潟大学公衆衛生)
佐伯 牧彦・和泉 徹
柴田 昭 (新潟大学第一内科)

【目的】新潟県における冠動脈硬化症の危険因子及び生活習慣について、若年者と中年者の間で比較を行なった。【対象と方法】患者は、40歳以下(若年)及び41~60歳(中年)の男性の冠動脈疾患患者各々45例と69例である。対照は若年患者、中年患者各々に対して、郵政職員を対象に行なわれた健診受診者より年齢を照合させて抽出した90例及び69例の男性とし、冠危険因子や血清脂質値、生活習慣についての比較を行なった。【結果】1. 若年者では中年者に比べ多くの冠危険因子の関与が認められた。2. 総コレステロール (TC) は、若年者では対照よりも患者で有意に高値であったが、中年者では患者と対照の間に有意な差はなく、若年と中年の患者の間にも有意な差はなかった。3. HDL-コレステロール (HDL-C) は若年も中年も対照より患者で有意に低値であった。4. TC/HDL-C は中年の患者よりも若年の患者で有意に高かった。5. 若年の患者と、若年の対照や中年の患者との間には食習慣の違いがみられた。